



7



8



9

6 何本かまとめた、わら2組を両手で挟み、手をすり合わせて編んでいく「藁緋(わらない)」という基本の編み方。代表の椎葉さんはものの数十秒で編み込んでいく。その「手」にはいろんな技がしみ込んでいる7 二足一セットのため、両足同じ形にすることが理想。一足を半分作ったところで、もう片方も半分作って形を近づける。何度も作ることでだんだんとコツがわかってくる8 つま先が出るのが良いわらじの条件。かかたがぴったりとフィットして、泥はねもしないのだとか9 私が作った子ども用のぞうりを地面に並べて記念撮影。作れば作るほど楽しくなっていくので、またいつか皆さんと一緒にわらじを作ってみたいです



6



2



1



3



4



5

1 2 3 世間話などで会話が盛り上がる中でも手は止まらない。座って作ることが多いが、会員の中にはイスと台を自作し、自分の作りやすい体制で作業をする人も4 できあがった子ども用のぞうりを一まとめに。作品は湯〜とびあや湯楽里などで販売されている5 毎週日曜日の夕方に湯〜とびあの音楽室で活動(3連休を挟むときは休み)

特集2 地域おこし協力隊レポート「和楽路の会」

和やかに楽しく、受け継ぐ技術

私が町内のイベントに出かけるたびに、何度も見かけたのが、わらじ作りの体験ブース。今まで実物を見たことがなかったわらじに興味を持ち、ブースに立ち寄ると、「和楽路の会」(椎葉茂代表=6人)の皆さんが笑顔で出迎えてくれました。「どう? あんたも作ってみらんね?」の一言に惹かれ、和楽路の会の活動に行ってみました。



リポーター
安井 佳奈

和楽路の会は平成17年に発足。現在、上球磨3町村の6人が毎週日曜日の午後6時からふれあい交流センター「湯〜とびあや」で活動しています。
名前は「和」やかに「楽」しい、「路」はわらじから旅や道を意味する。心のよきところになればとの思いから。現在の会員が物作りの得意な故椎葉種蔵さんから作り方を習い、昔から続く技術を受け継ぎました。東方組臼太鼓踊りや浅鹿野棒踊りに使われるわらじも会員が作っています。

喜ぶお客さんが喜び

7月8日に皆さんが作っていたのは、手のひらサイズの小さな子ども用のぞうりでした。赤ちゃんの1歳の誕生日を祝い、一升餅*を背負って歩かせるときに使うもの。「一生食いつばぐれないように、ぞうりを履いて人生の道をしっかり歩け」という思いが込められているそうです。

孫にあげるぞうりを作ってもらおうと、和楽路の会を訪ねた右田春美さん(68=水上村)は「あんたも作んない」と誘われて入会。「最初はできないと思っていたが、作り始めたら楽しくなってきた」とその魅力を語ります。

町内イベントのブースではたくさん子どもや若者の姿も見られます。外国の人は「日本の文化を学べてよかつた」と喜び、作ったわらじを履いて帰ったそうです。できあがった作品を嬉しそうに持ち帰るお客さんを、さらに嬉しそうな顔で見送る会員の皆さん。そのやさしさにほっこりしました。

オリジナルに湧く愛着
私も初めてぞうり作りに挑戦しました。ビニールひもを専用の台に引っかけて、つま先から編んでいきます。土台を作るための行程が多かったのですが、会員がつきつきりて優しく教えてくれました。形を整えながら編み、最後に、台に引っかけていたひもを引っぱると、あっという間にぞうりの形に。鼻緒を編み込み、はみ出たわらを切って形を再び整えたら完成。自分で作ったぞうりは、なんだかかわいく、愛着がわきました。

使われることが少なくなるにつれて、作る人や技術を知る人が少なくなっていきます。この会も多いときは30人ほどで活動していたそうです。代表の椎葉さん(74=田上)は「今のままでは、作り

方を次の世代に受け継がないのではと心配している。子どもでも作れるほど、簡単で楽しい。10月からは、正月用の『しめ縄飾り』も作るので、興味がある人はぜひ入会してほしい。体験会もいつでも受け付けたい」とのこと。

惹きつけられた和と楽

イベントのたびに笑顔で迎えてくれる皆さん。今回も部屋に入った瞬間から、温かく迎えてもらいました。わらじとぞうりの違いすら知らなかった私に作り方を優しく教えてくれました。作っている間も、世間話で盛り上がり、とても和やかな雰囲気。私がわらじ作りに惹きつけられた理由。それは会員の「和」と「楽」でした。



左から田口正順さん(71=上村)、山内美知枝さん(69=中里2)、椎葉茂さん、林田和孝さん(58=多良木町)。右田春美さんと右田エリさん(54=浅鹿野)を加えた6人で活動